

幼児教育保育学科学生の動物の描写について
—パンダの塗り絵に見られる事例—

宮 崎 百 合

Yuri MIYAZAKI :

On the Depiction of Animals by the Students of Child Care and Education
—A Case Seen in a Painting of a Panda—

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第76号 抜刷

2018年1月

幼児教育保育学科学生の動物の描写について —パンダの塗り絵に見られる事例—

宮崎百合¹

Yuri MIYAZAKI : On the Depiction of Animals by the Students of Child Care and Education

—A Case Seen in a Painting of a Panda—

本研究では、保育者を目指す学生が動物を描く際、どこまで科学的に正しく描写できるかを調査した。本学幼児教育保育学科の学生を対象に、パンダの模様について塗り絵形式で描写させ、その傾向を探った。その結果、「よく知っている」と感じていたパンダの模様について正しく描けない学生が予想以上に多く見られた。このことから、現代の保育学生の観察力・表現力の貧しさが懸念される。保育者養成校として豊かな表現活動を導き出すために、知識や体験を積み重ねていく授業のあり方を考えねばならない。

キーワード：造形表現 図画工作 動物の描写 保育者養成校

1. 研究の目的

保育現場において、生き物との関わりは非常に重要視されている。保育所保育指針・幼稚園教育要領では、「環境」領域の中で自然と触れ合う中でそのおもしろさや不思議さを十分に味わい、周囲の子どもや保育者等と共感しながら興味や関心を広げ、自ら環境に関わる意欲を高めていくことを「ねらい」で示している。また「内容」においても身近な動植物に親しみを持っていたわったり大切にしたりすることを求めている。

その一方で現代では自然そのものが減少しており、子どもたちが自然と触れ合う機会もどんどん少なくなっている。また親の世代が自然と触れ合うことについて無関心であったり、敬遠したりする傾向も強くなっている。

そのような中で、保育者を目指す学生の間でも自然とかかわったり自然に対する知識を深めたりする

経験が少なくなっていることもまた現実である。

1980年代に医学部の入試で「4本足のニワトリ」を描く大学生についての問題が報道されて話題になったが、高木が行った2015年の調査では4本足のニワトリを描いた学生は12.8%であり、1990年代の水準とほぼ同じであることが報告されている¹⁾。またカタツムリを描く調査では、正しくカタツムリを描くことができた学生は81名中5名(6.2%)であった²⁾。

このように、よく知っているはずの生き物を現実と大きく異なる形態で描いてしまう学生が多いということは、現実体験の不足や科学的なものの見方の未熟さがすでに大人・子どもを問わず広がっていることを意味している。しかし、生き物や自然に限らず、学生が「ことば」とそれが指し示す「モノ」や「意味」について関連付けて考えられることが少なくなっている事は、日々の授業を通じて痛感するところである。例えば「たきび」という歌は歌えても歌詞に出てくる「かきね」がわからないだけでなく、意味を知ることとも思いが及ばずただ歌うのみにとどまっていることがある。

1 鳥取短期大学幼児教育保育学科

子どもたちに様々な体験をさせ、適切な援助をすべき保育者を目指す学生にそのような体験や思考力が不足していることに危機感を感じる。そこで、本研究では保育者を目指す学生を対象に、「よく知っているつもり」の動物を正しく描写できるかを研究することにした。

2. 研究の方法

(1) 塗り絵方式による調査

ニワトリやカタツムリ等「日常的に見かけ、よく知っているつもり」の生き物の形を描かせる研究はよく見受けられるが²⁾、模様について描写した場合はどうであろうか。

造形表現の授業において近年感じることは「事物を立体的に捉えることの困難さ」である。例えば粘土で何かを作る際、三次元的立体ではなくレリーフ状に作る学生が年々増えていることを実感する。学生自身が製作した立体作品のラフスケッチをさせても、平面的なイラスト風の描画が圧倒的に増えてきた。平面で写実的な立体的な表現を行う「デッサン」に対して苦手意識を持つ学生は多い。

しかし本来日本人は平面的な表現に長けており、デッサンの矛盾があったとしても平面構成としては優れた作品を多く生み出してきた。浮世絵に代表される「立体物を平面的にデザインする能力」は西洋において評価されている。

そこで本研究では立体的な写実性を省いて「模様を描き込むだけ」に絞り、立体的な描写に対する苦手意識を軽減しながら模様に関する写実的な描写に集中できるように配慮した。

動物の種類はパンダを設定した。実際には日本国内でパンダを見ることは簡単な事ではないが、パンダは白黒の模様がはっきりしており、塗り絵として模様を描き込みやすいと考えたからである。またパンダは保育現場ではクラス名やグループ名に取り入れられたり遊び歌に盛り込まれたりしており動物の中では人気が高い。このほかお菓子や日用品のイラ

ストなどで子ども達にも親しまれている。また2017年6月には上野動物園でパンダが誕生しており、注目度が高いと考えたからである。

(2) 調査の手順

最初に「パンダを実際に見たことがあるか。または実物の写真か動画を見たことがあるか」と口頭で問うて挙手にて回答を得た。ここで「実物のパンダを実際に見たこと」に絞らなかった理由は、これだけ親しまれているにも関わらず本物のパンダ自体が非常に珍しく、国内でもパンダを見られる場所が限定的であると考えたからである。次に線のみで描かれた白いクマの絵を配布し、「制限時間10分以内に『本物のパンダの模様』を思い浮かべながら鉛筆で描き加えるように」という指示を出した。

(3) 調査対象と期間

調査は鳥取短期大学幼児教育保育学科の1年生の中から「子どもの造形指導法Ⅰ」を受講している130名(男子26名、女子104名)に対して平成29年7月の授業時に行った。

(4) 判定基準



















1) 体全体

- A. 正しい描写：後足・耳・目の周りが黒く、前足から背中にかけて帯状の黒い模様がある。
- B. Aに準ずるが、尻尾が黒い。
- C. 前足・後足は黒いが背中に黒い帯模様が無い。
- D. 牛の様なまだら模様になっている。
- E. その他

2) 頭部

- a. 正しい描写：耳・目の周りが黒い。
- b. 目の周りは黒いが耳は白い。
- c. 耳は黒いが目の周りは白い。
- d. その他

表1 パンダの塗り絵

体全体		頭部			
		a. 耳・目の周りが黒い	b. 目の周りは黒いが耳は白い	c. 耳は黒いが目の周りは白い	d. その他
A. 耳・目の回り・後足のほか、前足から背中にかけて帯状に黒い			0	0	0
14名(男1 女13) 10.8%	14名(男1 女13) 10.8%				
B. Aに準ずるが尻尾が黒い			0	0	0
8名(男0 女8) 6.2%	8名(男0 女8) 6.2%				
C. 背中への帯状の黒模様が無い					
50名(男6 女44) 38.5%	41名(男6 女35) 31.5%	7名(男0 女7) 5.4%	1名(男0 女1) 0.8%	1名(男0 女1) 0.8%	
D. まだら模様				0	
18名(男8 女10) 13.8%	10名(男5 女5) 7.7%	5名(男2 女3) 3.8%		3名(男1 女2) 2.3%	
E. その他					
40名(男11 女29) 30.8%	16名(男5 女11) 12.3%	16名(男3 女13) 12.3%	1名(男0 女1) 0.8%	7名(男3 女4) 5.4%	
合計	130名(男26 女104) 100%	89名(男17 女72) 68.5%	28名(男5 女23) 21.5%	2名(男0 女2) 1.5%	11名(男4 女7) 8.5%

3. 結果と考察

(1) 実物よりイメージが先行するパンダ

頭部を含む全身について正しくパンダを描けたA群は14名(10.8%)であった。尻尾が黒い他は全身を正しく描けたB群は8名(6.2%)であった。実際のパンダの尻尾は白いが、イラストやぬいぐるみなどで尻尾の黒いパンダが散見されるため、間違っただけで覚えている可能性がある。これは実物に触れることが少なくイメージが先行しがちなパンダゆえの特徴と考えられる。

前足から背中にかけての帯状の黒い模様についても、全身が後ろから捉えられる機会が比較的少ないためか、50名(38.5%)と最も多かった。

しかしD群の牛のようなまだら模様も18名(13.8%)

と予想以上に見受けられた。

頭部については、正しく描けたa群は89名(68.5%)であった。パンダの目の周辺は黒いが耳が白のままのb群は28名(21.5%)で、パンダの最大の特徴ともいえる目の周りの黒い模様を描き込まなかったc群は2名(1.5%)であった。また、頭部に本来は無い黒い模様を描き込んだd群は11名(8.5%)、頭部全体が白のままの回答は0であった。

(2) 男女別の傾向

今回の調査では、全身が正答のA群の中で男子が占める割合が1名(0.8%)だったのに対し、B群0名(0%)、C群6名(4.6%)、D群8名(6.2%)、E群11名(8.5%)と、正答とは大きく異なる形態のものほど男子学生の割合が増える傾向があった。これは「ニワトリ・アリ・トンボ」の調査³⁾でいず

れの生き物の描写についても男子の方が正答率が高かった結果と異なる傾向を示す。

「ニワトリ・アリ・トンボ」について男子の方が正答率が高かった理由は、これらの生き物が日常的によく見かける生き物であること、女子より男子の方が生き物に対して抵抗が無く自然遊びの経験が豊富なことから、このような結果になったものと考えられる。一方、今回の研究で男子より女子の方が正答率が高かったのは、パンダの顔や動作の愛くるしさから女子の方がパンダに対して興味関心が高かったからではないかと思われる。

これはプレカレッジで動物に関する絵本を選ばせたところ、科学的な見地からではなく擬人化された動物の物語を選ぶ生徒がほとんどだったという研究報告⁴⁾にも通じると考えられる。日本においてパンダとは科学的見地ではなく「かわいい」という感覚で関心を寄せていることが影響しているのではないだろうか。

(3) 知っているつもりと現実との乖離

今回の調査で、実際の姿とは大きく異なる「全身まだら模様」に塗った学生が13.8%にのぼったり、目と耳以外の頭部に模様が描き加えられたりしたe群の事例を見ると、挙手での質問に反して予想以上に「『知っているつもり』で実は知らないこと」は多いのではないかと考えられる。

4. 課題

今回の研究では「よく知っているつもりのもので、いざ記憶だけで描いてみると間違う」ことが多いたことが示された。

しかし一番考慮しなければならないのは、実はよ

く知らないのに「知っているつもり」でいることの怠慢さに気づかないことではないだろうか。

造形表現や図画工作の授業では動物を作ったり描いたりすることが多いが、その際には事前に自分でその動物について調べること、また授業の際に動物について図鑑やドキュメンタリー映像など科学的なアプローチで理解を深めるようにしている。記憶だけに頼ってはいは豊かな表現にはならない。

保育現場では造形表現に限らず動物をモチーフにした活動が多い。だからこそ、保育者を目指す学生がより理解と関心を深め、子ども達に生き生きとした活動を提供できるような環境が求められる。そのためにも、より一層の授業の充実が求められる。

引用・参考文献

- 1) 高木義栄・木下智章・林幸治「保育者志望学生の生物形態認識への過去の自然体験の影響」、『近畿大学・九州短期大学研究紀要』第46号(2016), pp. 15-30.
- 2) 松田春奈・田代優秋・浜野龍夫「大学生にみる身近な生き物の認知度—カタツムリを描けますか?」、『徳島大学 大学教育研究ジャーナル』第11号, 2014, pp. 63-68.
- 3) 林幸治・田尻由美子「『自然とかかわる保育』の実践的保育指導力の男女差について」、『近畿大学九州短期大学研究紀要』第35号, 2005, pp. 61-72.
- 4) 松尾智則・笠井キミ子・小川和子・山崎篤・古賀和弘・向井坂幸雄「入学前教育の取り組みと成果(専門分野編)2012」、『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要』第46号, 2014, pp. 221-227.